

平成14年度新漁業管理制度推進情報提供事業 浅海定線調査（陸奥湾） （要約）

今井美代子・大水 理晴・三津谷 正・平澤 厚子
試験船なつどまり（山田 雅治・長津 司・吹越 弘光・逢坂 健幸・本堂 洋一）

この調査は、陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報のための基礎資料を得ることを目的として実施しているものである。本年度は、継続31年目の調査年次であった。

調査方法

1 調査船 なつどまり（青森県水産増殖センター試験船、24トン、770ps、16.5ノット）

2 調査点 湾内St.1～6の6定点、湾口部St.A, Bの2定点、計8定点。（図-1）

3 調査方法及び項目

調査方法は、平成14年度「資源評価調査事業」沖合海域海洋観測及び資源管理体制強化実施推進事業に関わる海洋観測調査指針（東北ブロック関係）（平成14年4月、独立行政法人水産総合研究センター東北水産研究所）に準拠した。

調査項目は以下のとおり。

① 気象、海象

天気、雲量、気温、気圧、風向、風速、波浪

② 水色、透明度

③ 水温、塩分

0 m、5 m、10m以深は底層（底上2 m）まで10m間隔

④ 溶存酸素

St.1～6の20m層、底層及びSt.2と4の5 m層

4 調査回数

毎月1回（1月から12月の計12回。但し、平成14年は3月欠測のため11回）

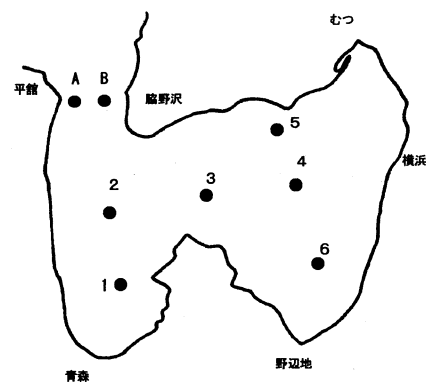


図-1 調査地点

調査結果

本調査結果からみた、平成14年における陸奥湾の海況特徴を以下に示す。

なお、平年比の階級表現に用いている平年値は1972～2001年の過去観測値の平均値である。

発表誌：平成14年度新漁業管理制度推進情報提供事業 浅海定線調査結果報告書（陸奥湾）、青森県水産増殖センター、平成15年3月

平成14年の海況の特徴

1 透明度の最低値はSt. 5 の 1 月、St. A の 4 月の10.0mで、最高値はSt. 5、A、B の 9 月の19.0mであった。

2 水温の年間最低値は、St. 1 の底層とSt. B の 0 m層のみ 4月に、このほかは 1月または 2月に観測された。その極小値は各層ともすべてSt. 5 の 1月に観測され、0 m層で4.40℃、20m層で4.30℃、底層で4.32℃であった。

年間最高値は、0 mと20m層では 8月または 9月に、底層では 8月から10月に観測された。その極大値は、0 m層ではSt. 5、6 の 9月の23.60℃、20m層ではSt. A の 9月の22.80℃、底層ではSt. 1 の10月の19.72℃であった。

平年に比べると、1月はやや低め、2月は平年並み～やや高め、4～7月はやや高めからかなり高め、8月は平年並み、9月はやや低め、10月は平年並み、11月はかなり低め、12月はやや低めであった。

3 塩分の年間の最低値は、0m層ではSt. 1 の 7月の30.78、20m層ではSt. 6 の 8月の32.14、底層ではSt. 6 の 8月の33.21であった。年間の最高値は、0m層ではSt. B の 1月の34.15、20m層ではSt. A、B の 1月の34.14、底層ではSt. A の 9月の34.23であった。

塩分の年間の推移は、平年に比べ、1～2月は平年並み、4月は平年並み～やや低め、5～6月は平年並み～やや高め、7月は平年並み、8月はかなり低め、9月は20m層以浅でやや低め～かなり低めのほかは平年並み、10月は上層でやや低め～かなり低め、下層でやや高め～かなり高め、11月は概ね平年並み、12月は平年並み～やや低めであった。

4 溶存酸素量は、St. 2、4 の20m層で 4月に、このほかの調査点、層では 1月または 2月に年間最高となった。この後は低下傾向が続き、8～10月に年間最低となり、10月以降は上昇傾向が続いた。年間最低値は20m層ではSt. 5 の 8月の7.07mg/ℓ、底層ではSt. 4 の 9月の3.51mg/ℓ（飽和度43.75%）であった。底層では、St. 4 で8～10月に、St. 5 で9月に3.51～4.56mg/ℓ（飽和度44～60%）と低酸素または貧酸素の状態がみられた。特にSt. 4、5 では9月には水産用水基準記載の「底生生物の生息のために最低限維持しなければならない底層の溶存酸素量4.3mg/ℓ」未満となった。